

《対談》 大学改革の一〇年と創立一五〇年に向けて

― 日高義博理事長・佐々木重人学長 ―

※本対談は、令和二年（二〇二〇）七月二二日に専修大学神田キャンパスにある理事長室で行われた。対談の一部は、『専修大学一四〇年―大学改革の一〇年―』（学校法人専修大学 二〇二〇年九月）に掲載したが、紙幅の関係上、要旨のみとなったため、対談の全体像を紹介する意味で、ここに改めて掲載させていただいた。

専修大学における新型コロナウイルス対応

（日高） 今年は本当に大変な年で、新型コロナウイルスへの対応で大学では卒業式・入学式が中止になり、その後の授業への対応も先生方がご苦労されながら、大変な取り組みをなされています。いまだ出口が見えずというところですけど、どういった点がご苦労されましたか。

（佐々木） そうですね、卒業式・入学式が中止になったことはショックでしたが、あの時は、まだ緊急事態宣言のような話はありませんでした。ただ式典の中止はあくまでも三密を防ぐための対応

で、授業に関しては対面ではないかと皆、思っていました。だから会議の中でも気をつければ対面はできるよね、無理にオンラインでやる必要はないんじゃない、という雰囲気がありました。

ところが、感染者が次第に増えていって緊急事態宣言が出た瞬間に、一気にオンライン授業にシフトしなければいけないと、先生方の顔色が変わったことをよく覚えております。ただその時にネットワーク情報学部の松永賢次学部長や望月俊男先生といったこの分野に知見を持っている先生方が中心となって、オンライン授業の仕組みを検討していただけたのは非常に心強かったです。

でも、最初はそうした知見を持っていない一般の先生方にどうやればオンライン授業ができるのかを知っていたら作業から始まったので、それが大変でした。結局、対面授業では名調子で語るような授業が可能な先生方も、オンラインという形でやらなければならなくなった。言わば全員が新任教員のような雰囲気、一から始まったというような感じでした。ですから、学生のアンケートの中



にはオンライン授業にすぐに入らなかったのはなぜか、というような意見もあったのですが、「じゃあ明日からやります」と言えるような状況ではなかったんですね。やるからには最低限のことを先生方に知っていただく必要があった。つまり、発信する側と受信する側の準備がある程度、整う必要があったのです。それが最短で五月一日ということだったので、これが遅いこともあったので、これが遅いども、我々としては最大限の努力をした結果であったと今は思っています。

一口にオンライン授業といっても、スタイルは様々で、ビデオ配信をするタイプや、チャットと言ってリアルタイムでコミュニケーションを取るタイプなど、色々なタイプがありますが、初期段階で上手く準備ができなかったのは素直に学生諸君に申し訳ないと思っております。様々な検討を行って、どんな授業をやればいいのか、ということはかなり考えました。受信側の最低限の準備としては、

スマートフォンがあればいいということにしましたけれども、あの時期、社会全体でインターネットを介したやり取りを行っていたため、その基盤が逼迫するのではないかと言われていました。画面越しに先生と学生が対面して、オンラインでやり取りができる方式は最もデータ量が増えるので、このやり方は少し控えて欲しいというメッセージが出たんですね。いわゆる学校に対するデータダイエットの協力要請です。ですから専修大学では、静止画面を提示して音声だけを使って、なんとか学生諸君とコミュニケーションを取るという方法でオンライン授業を行うことを当初は推奨したのです。学生諸君から見た場合は無味乾燥で、これが大学の授業なのかという誤解というか、印象を持たれたのは事実だったと思いますし、先生方からも本当は動画を使ってオンラインでどんどんやりたいという意見が出たのですが、我々としてはまだそれは無理なんだと自制しました。そのため非常に悩みを抱えながら授業をした先生方も多かったのかなと思います。

その後、インターネットの環境がだいぶ改善されてきて、途中からGoogle Meetを使った同時リアル配信型の授業を増やしていてもよいのではないかと方針を転換しました。それによってかなり学生諸君の精神的負担が軽くなったし、理解度も高まったということをお聞きしましたけれども、それ以上に先生たちが慣れない機材の操作にあたって、授業中はスムーズにいかないところがあつたともお聞きしています。後期もオンライン授業を主体にしなけれ

ばならないという現実があるので、現在は前期で学生諸君からいただいた意見を基にしてオンライン授業の質を向上させる準備をしています。今後の方針としては、受講している学生がより満足できるような授業の運営方法を検討し、それを先生方にもしっかりと提示していきたいと考えています。夏休みは、それに向けての準備期間と捉えています。

それ以外にも学生諸君は、経済的な負担を大きく強いられているので、専修大学としては緊急支援策としての奨学金制度を立ち上げるなどできる限りのことを精一杯やっておりますが、どうもまだ広報的には今ひとつ浸透していないようで、アンケート結果等を見ると、大学側の試みが届いていない学生諸君が少なからずいます。もっと早くわかっていたら奨学金を申し込んでいたのに締切が過ぎてしまっていたとか、受給資格として家庭所得に基準を設けているのですが、その基準よりは上の所得なんだけれどもアルバイトがまったくできない、親の所得が以前よりかなり減っているといった、大学に対する一種、やり切れない思いを書いてきた学生もいました。今はどこにもコミュニケーションできる相手がいないので、このアンケートで思いつきり自分の気持ちをぶつきたい、そういう思いがあったのでしょうか。

そのほかにも、先生たちは頑張ってくれているけど、課題が多いので大変だという声も聞こえてきます。先生方の思いと、学生のキャパシティがどうもボタンを掛け違ったようになっていて、先生

方はオンラインだから課題を出して学生諸君を評価する材料が欲しいという思いがあります。一方、学生からすると一つの科目について一時間、または二時間かけてレポートを書けと言われても、一日に五時間あるとそれが五つも続くわけです。ですから徹夜してレポートを書いて、また明日に備えるという、非常に体力的にも精神的にも辛い気持ちをアンケートに書いてきた学生諸君もいましたね。

そんなことで後期の喫緊の課題としては、オンライン授業の質の向上が挙げられますが、日高先生には更に必要に応じた経済的支援をお願いできればと考えています。今後のオンライン授業の質の向上という観点から言うと、スマートフォンで授業を受けるという形に限界を感じている学生諸君も多くなります。そして先生方からもパソコンの利用を想定したオンライン授業になるとだいぶやり易いという意見が出ていますので、新しい支援策を講じる必要があると、学部長の先生方からもうかがっています。私自身も学生のアンケートを見て初めて気づかされるようなことが多々ありました。

前期は緊急避難的な意味合いでオンライン授業をやらせていただきましたけれども、後期もやるのであったら同じ形ではもう許されないと切々と感じておりますので、それに伴った質と量の両面での向上を図る必要があるのかなと考えています。明日も学部長懇談会で意見交換をいたしますけれども、アンケートの結果をなるべく反映するような形で学生の満足度を少しでも引き上げるような努力をこの夏休みにして、後期に備えたいと思っている次第です。



(日高) コロナ感染が問題になった時、正直に言うくと、五月ぐらいには収束を迎えるかなと思っていました。しかし、まったく収まる気配がない。そこで、法人として最初に考えたことは、学費が払えなくて学業が継続できない学生を放置することだけは回避しなくてはならないということでありました。

東日本大震災が起こった際、専修大学は独自の奨学金支援制度をつくりました。地震発生直後は、二億円あれば困窮する学生の救済ができると考えていましたが、卒業年次までの約三年支援し続け、トータルでの支援金額は六億円を超えました。ただ、あの時はその後、文科省が助成金を出してくれましたので、大学としては大変助かりました。専修大学は学生数も多く、かつ伝統のある古い大学です。今回も国からの支援策に頼るだけでなく、自らが率先して学生を支援しなければいけないという強い思いで、緊急の経済支援策を立てました。ただし、最初からロングランになるだろうと思っ
ていましたし、しかも保護者の方々の経済的な疲弊は、おそらく来年の方が苦しいかなと思っ
ています。

専修大学には育友会の奨学金もあるし、校友会の奨学金もあって、災害支援のための大学独自の支援もあります。最初は手堅く、

そして様子を見ながら着実に進めていく予定です。来年はさらに救済しなければいけない層が増えると思いますので、それに応じて動くというやり方になるかなと、当初から私は考えていました。

ただ東日本大震災、あるいは九州の地震や豪雨の場合には地域が限定されていたので、どれだけ支出すればいいのか、だいたいの試算はできました。しかし、今回は全く試算ができない。それでも、本当に困っている人を一人でも二人でも救っていく。そういう制度を今は進めている状況です。様子見なんて、のんびりし過ぎているという批判もありますけれども、本当に困っている人を一人でも二人でも助けるといふスタンスで最初はいかないと、出口が見えなくなります。まだ出口の見えない状況ではありますが、割と早い段階でアドバランを上げて、募金活動を始めたおかげで、多くの方から支援をいただくことができました。ただし、こうした支援活動は、距離ではなく、マラソンのようにロングランで続けていく必要があると思います。

それから、オンライン授業は、佐々木先生がおっしゃったように大変な、いまだかつて経験していない規模の大きいものなので、どういう形になるか本当に試行錯誤だったと思います。文科省は、後期授業については対面式の授業を組み入れる工夫をしてくださいと言っています。やはり、文科省も言っているように、オンライン授業は補助手段であって、大学の授業というのは対面式で初めて学問を伝達できるという認識を、私自身は持っています。だからその



ための工夫を考えなければいけません。オンライン授業だけで、卒業させるわけにはいかないですよ？

(佐々木) さすがにそれは無理だと思います。

(日高) ただ、対面式は規模の問題がありますよね。三密を避けなければならぬ。できることから始めるということで、実験関係の授業を対面にしたのは正解ですし、ゼミとかにも色々な工夫が必要ですが、やはり、顔を見て話すことによって行間にあるものを伝える、学問の深さを伝える、そういうものがないと大学の授業じゃない。後期は、両方をうまく使いながら、どうやって元に戻していくのがいいのか考えていく必要があるでしょう。

(佐々木) 一年生と二年生以上とのアンケートの結果を比べますと、はつきりと答えは分かれていまして、一年生は一回もキャンパスに足を踏み入れていないので、とにかく大学に行ってみたくてという欲求が非常に強いんですね。ですから対面授業にして欲しいという意見の方が圧倒的に多いです。その前提には、友達もいないし、サークルにも入っていない、先生の顔も見えていない、そういう気持ちがあると思います。しかし、二年生以上の学生は、友達との関係

ができあがっているのと、ゼミなんかの繋がりがあって、オンライン授業の便利さをある一定のレベルは理解しているところがありますね。ですから後期は、一年生の対面授業の割合を二年生以上より少し厚くして、授業というよりもお互いがコミュニケーションを取り、大学を知ってもらおう場をつくるという意味で、対面授業の比率を多くする。また授業が始まる九月の下旬より少し前に、一年生だけに対して、ガイダンスというか、オリエンテーションを行い、とにかく大学へいらっしやいというようなスケジュールを組もうとしています。一年生に対するケアをある程度視野に入れた対面とオンラインのハイブリット型で組もうとしています。

(日高) 緊急事態宣言が出たあと、神保町の古本屋街を少しだけ歩いたことがあります。その時に古本屋街のシャッターが全部閉まっていたんですね。通りに人がいないという経験は、大学に五〇年間通っていますが、初めてでした。町に人がいない。当然、新しい校舎にも誰もいません。学生の声は一切しない。学生がいない大学というのは単なるハコモノでね、死に体だと改めて感じました。生田校舎に行った時も同じ経験をしましたけれども、こういう事態は避けなきゃいけないですし、感染症に対応しながらも、ある程度方策が見つかったら徐々に戻していくということが大切だとつくづく思いました。

先週の金曜日に新校舎一階の「SENDAI-Kaffee」がようやく開店の運びとなつて、佐々木先生がよく言われる神田神保町の町おこ

しという点では、一つ火が点つた。子どもを連れだした親御さんとかい
らして、やっとここまで来たという気がしましたね。安全策を講じ
ながら、学生の声が聞こえるキャンパスに戻すために万難を排し
て、ロングランになるとは思いますけれども、やっていかざるを得
ないと思います。

法人としての本当の正念場は、後期から来年度にかけての財政の
健全化をどう図るかです。大きな課題ですけれども、職員と雑談し
た際には、建物も、教職員も、学生も関東大震災の時に比べれば、
まだまだ健全なんだから、あとは全員が一丸となって頑張れば大丈
夫だという話をよくしています。関東大震災や戦後の新制大学への
移行といった多くの試練を、教職員・学生が一体となって乗り越え
た大学としては、一番苦しい状況を知っているから、コロナにだっ
て勝てるだろうなという自信があります。

大学改革の一〇年を振り返って

(目高) 創立一三〇年を迎えた際、今後一〇年間のスパンで専修大
学は何をやるべきか構想を練った時に、私はこの一〇年を大学改革
の時機だと捉えました。あの時期、問題となっていたのは、まさに
今年に当たりますが、二〇二〇年問題なんですね。志願者数と大学
の総定員が一致するという社会状況で、今の専修大学が戦えるの
か。志願者数も一九八九年をピークとすると約半分になっている状
況で何を為すべきか。しかも、文科省は、大学に対して護送船団方

式を放棄した。これから各大学独自の特徴を出して生き抜いていき
なさいと突き放したわけですよ。

その時に専修大学は、研究に基づく教育を行っていくべきだと決
断した。教職員の現状の定数は変えない、それから学生の定員数も
変えない。しかし、出口も含め教育の質は、向上させなければなら
ないという前提がありました。それで何を為すべきか。一つは学部
学科の改組ですね。この一〇年間の社会的変動に合った学部学科へ
転換をしなければいけない。それからもう一つは、それに見合った
建物をちゃんと建設していかなければいけないということで、今後
一〇年間の計画を立ててスタートしました。

学部学科の改組は、亡くなった矢野建一前学長から佐々木先生が
引き継がれて、だいたい目標通りに進んだ。しかし、建物の方は東
日本大震災で予定が大きく狂ったんですね。神田キャンパスの校舎
一棟と生田キャンパスの校舎二棟を解体して、新たに校舎を建てな
ければいけなくなりました。これは計算に入っていなかった。その後の
靖国通りの新校舎ですけれども、これも難工事となった。東京二〇
二〇オリンピック開催の関係で資材が高騰し、現場に携わる人も不
足した。東北や九州の大きな災害もこの状況に拍車をかけた。そし
て今回のコロナ禍にも若干、時期が重なったので資材が海外から来
ないという状況に陥った。最後は本当にギリギリでした。140年
記念館は本当に苦難の建物でしたね。コロナ禍の中で落成式も残念
ながら小規模の人数でやらざるを得なかった。多くの方にお披露目

ができなかったのは残念です。

最終的には、学部学科の改組、キャンパス整備の両方できましたが、本当に、いつも剃刀の刃の上を渡っているような気がしていました。

(佐々木) 文科省との関係も大きかったですよね。

(日高) そうですね。大学の定員に規制がかかって、東京二三区内には新学部や新学科の設置はまかりならないとなった時は、本当に青ざめました。これまで私は、大学行政は法に基づいてやっていくべきだと、文科省の審議会でも主張してきました。例えば、定員規制のような特例をいきなり出されても、大学改革は一、二年ではできない。大規模な大学は一〇年かかると声を上げてきた。あの時に二三区に学部を移転できたのは専修大学と中央大学でしたので、それを理解してくれたのかどうかはわかりませんが、ともかく例外措置でした。

本当は今、一年生がいて、学生たちの声が聞こえる時期ですが、この点については本当に無念の思いがしますけれども、総じて言えば、法人と教学が一体となって一〇年間かけて大学改革を行い、目標を達成できたのだと思います。

教学の方は佐々木先生が苦勞されたと思いますけど。これは大変だったと思います。

(佐々木) 有難いことに、教員の先生方は大変協力的でした。国際コミュニケーション学部新設にあたっては、教員組織を含めて、か

なり大きな改編がありました。その時にお一人お一人に確認をしていったんですけれども、皆さん事情をよく理解されていて、協力を惜しまない姿勢を示してくれて、本当に助かりました。

私は矢野建一学長の時代、商学部長をやっていたので、この一〇年間で学部長として、そして学長として体験してきました。商学部長の時代には、矢野学長が新学部設置に心を砕いて、どんな学部をつくったらいいのかを考えるための諸会議を学内で開きながら、要綱を形成する過程を見ていました。商学部長として、生田から神田に学部を移転させるためのプレゼンをして欲しいと言われて、急いで夏休みに関係する先生を集めてプレゼンをして、それで休み明けに矢野学長から「商学部に移転してもらうことにしたから」って話を言われた時の高揚感というか、達成感というか、あの時のやらなきゃいけないなという気持ちを思い返しますね。

いざこれからだ、という時に矢野学長が急逝されてしまって、今度は私が矢野学長の役割を担うことになったわけですが、矢野先生が準備してきたレールの上を、しかもかなり良く磨かれたレールの上をスーッと走ってくるような形でここまで来ました。日高先生がご苦勞された部分とは違い、教育システムの変革をどのようにして外部に発信したらいいのか、もっと言えば、受験してくれる高校生に対して知ってもらうための広報活動が、私の関心の多くを占めていました。

先ほど、日高先生がおっしゃった内容を教学的な視点から見ると

と、やはり「社会知性の開発」という教育目標を具体的に見える化する作業がこの一〇年だったと言えます。専修大学の学生に備えてもらいたいこの資質をどのようにして教育するのか、そういうことだと思っんですが、それがこの一〇年間でかなり具体的に見える化したと思うんですね。深い人間理解という点に関しては人間科学部を、倫理観に関してはジャーナリズム学科を、独創的な発想という点では経営学部ビジネスデザイン学科を、そして最後に、地球的視野という点では、国際コミュニケーション学部を新設した。このように教学サイドの改革は、すべて「社会知性の開発」のために行ってきたんだなと。このことがはっきりわかる一〇年でしたな。

(日高) ちょうど創立一三〇年になる前、私が学長の時に志願者数が三万人を割ったことがあるんですよ。恐ろしいでしょ。これは危機的状況だと思って、それで志願者数五万人というアドバルーンを打ち上げました。その時に言われたのが「戯言を言うな」です(笑)。でも目標なきところに達成はないですよな。

それで五万人を達成したのは去年。そして今年も連続して五万人を超えた。結局、一〇年かけて達成したわけですね。ただし、一八歳人口は、これからも激減していきます。今度の一五〇年に向けての戦いは、極めて厳しいものがあると思います。大学進学率が六〇%を超えるのは、なかなか難しいでしょう。創立一四〇年までは計画通りに何とか達成できたけれども、今後一〇年間については、どういう計画を立てて、どういう手を打っていくのか。本当に教学

と法人が一体にならないとできないことだと強く思いますね。あと、アドバルーンは、絶対に上げないと駄目です(笑)。経験上、目標がないと達成はない。

もう一つは卒業生が社会に出て、いかに活躍しているか。専修大学の建学の精神を、社会に出ていかに花開かせているか。ここを志願者や在学生に見えるようにしていかなければならない。とくに、この一〇年間で卒業した卒業生については、華々しく見せて欲しい(笑)。例えば、公認会計士に現役の商学部二年生が受かるようになったというのは、極めて心強いですね。しかも、公認会計士の合格者数は私大では一〇番目くらいに入ってきました。そういう点では、司法試験の方はもうちょっと気合いを入れないといけないですね(笑)。スポーツもわかりです。箱根駅伝に出場しないと、学生も卒業生も高揚しない。専修大学のパワーの見せ方もね、今後はどうちよつと考えなきゃいけないと強く思います。

創立一五〇年に向けて

(佐々木) 一五〇年までの一〇年のプロセスということですけども、今は特にコロナ禍の中にあって、大学がどのような社会的役割を果たせるのかについても考えていかなければならない状況にあると思っています。大学のホームページにも掲載されましたけれども、SDGsという国連が推奨した持続可能な開発目標というのがあって、その中にコロナウイルスのような伝染病の感染予防のため

に何ができるかみたいな目標も入っている。近年、温暖化とか異常気象とか色んなことで今、地球が苦しんでいる。だから人間が何かアクションをしなくちゃいけないんじゃないか、という目標を一七個定めたものがSDGsです。これを「社会知性の開発」が言及する「社会の諸課題の解決」のために何ができるかを検討してもらいたい。専修大学の目標である「社会知性の開発」とSDGsとは非常に親和性が高い。SDGsは二〇三〇年までに目標を達成するということを謳っている、それを新たに専修大学の中で積極的に推進することで二人三脚の関係ができあがるんじゃないかなと思っていきます。この意識を先生方が共有することによって、専修大学に入学を希望する高校生が増えていく可能性も高まります。というのも、現在、高校でもSDGsへの取り組みが非常に盛んで、SDGsを高校の専門の学科として立ち上げるという話も出て来ているほどです。コロナ禍がある程度落ち着いたら、一気にSDGsが前面に出て来る時代が来るのかなと思っています。ですから、専修大学として積極的に取り組む姿勢を見せるというのはとても大切なことだと思っすね。

あと専修大学にしかできない教育研究活動とは何かについても考えなきゃいけない。例えば、今、日高先生がおっしゃったように国家資格にチャレンジする学生が専修大学には集まってきているので、それを後押しする仕組みを今回、神田に移転してきた商学部と法学部がコラボすることによって、かなり強化できるのではないかと

と思いますね。それを神田という場所で展開することは非常に意味のあることだと思います。教育のインフラも非常に充実していますので。あとは神保町という古本屋街がありますし。

(日高) これは活かさないといけないよね。

(佐々木) これはどの大学にもある財産ではないですよ。神保町にしかない財産なんです。僕もよくお世話になっているんですが、大型スポーツショップがあったり、喫茶店やカフェがあったり、まさに学生街としての神保町の発展を専修大学は担う責任があるし、街を盛り上げることによって専修大学まで活かされるんじゃないかなと思うのです。僕はちよつと気取って「神田神保町カルチュア」と言っていますけれども、長年、神保町に居を置いた専修大学の役割を学生や教職員が共有し、この地域に魅力を感じる人や高校生を増やすことで、今後も専修大学がこの街にある意味を知ってもらいたい、そういう期待をしています。その意味で町おこしへの協力も当然だと思います。商学部の先生たちはそういったことに非常に関心が高いです、商店街の活性化を含めて「神保町界隈を活気づけるような役割を専修大学は果たしているよね」という地域からの評価をいただけるような神田キャンパスになったらいんじゃないかなと思いますね。

(日高) 新しい切り口はできてきましたよね。学部が三学部揃ってね。

(佐々木) カルチュアタンというぐらいですから、国際コミュニ

ケーシヨン学部があるっていうことが非常に大きくて、国際化というのは昔から神保町と切っても切れないファクターだと思います。ですから、そういった中に何か仕掛けや町おこし、そして国際化という神保町が持っている様々な要素について、この三学部が連携して取り組んでいくという姿を積極的に発信していく。それがやはり大学の役割なんじゃないかなと思います。

一方、生田キャンパスなんですけれども、あそこもやっぱり魅力的なキャンパスになったと思うんですね。商学部が移転したことによって、かなり学生密度が緩和されました。広大で快適なキャンパスができてきている。しかも教育的な面から言うと、経済学部に現代経済学科や生活環境経済学科が、経営学部にはビジネスデザイン学科、文学部にジャーナリズム学科ができた。ネットワーク情報学部があつて、文学部には語学系や環境地理、歴史や哲学といった学科がある。実は、生田キャンパスの研究者にはデータサイエンスをやっている方が多いんです。文学でも統計的な処理を使って解析する作業が盛んに行われていますし、経済学部では計量経済学が非常に盛ん、それからネットワーク情報学部はまさにデータサイエンスそのものですよ。人間科学部の心理学や社会学は統計学なしではやっていけない学問で、データサイエンスの本来本元ですね。このように生田キャンパスにある学部の共通キーワードはデータサイエンスなんです。

今後、地域が抱える課題の解決には、ビッグデータの解析が重要

なってきました。生田キャンパスにある学部のそれぞれの分野が力を合わせることで、データサイエンスのメッカになる要素が非常に高いと思うんですね。それに、川崎市はIT系企業が非常に多い地域でもあります。専修大学は川崎市や多摩区と非常に良好な関係を築いていますので、産学連携や産学官連携を行うことで地域の課題解決をお手伝いする、または、生田キャンパスの先生たちの力や学生の活力によって地域貢献していく。それが生田キャンパスの魅力をもっと高める起爆剤になるのではないかなと思うので、研究助成制度も立ち上げました。コロナ禍によってデータサイエンスの活躍領域は非常に高くなると思います。

例えば、これから対面授業を始めますが、食堂に学生が密集することを避けたいということで、食堂の混雑状況をモニターで見えるようにしています。生田キャンパスは広いので、食堂に行つてから「混んでるから、あつち行こう」となると時間が足りなくなつてしまふ。だから今あそこの食堂が空いてるから、あつちに行つたほうがいいんじゃないかと提示してあげることができると。学生諸君がスマートフォンか何かで積極的に自分たちの居場所を確認することで、コロナ禍における快適なキャンパスライフを支援することができます。このようにデータサイエンスの役割は非常に大きいと思います。そういうような仕組みを、あらゆる面でやってみることで、学生諸君の意識が高まる。高校時代にやったことのある生徒ならなおさらですが、大学でもSDGsやデータサイエンスを勉強できるといふこと

は、キャンパスライフの一つの楽しみとして、生田だけでなく、神田の両キャンパスで、今後打ち出すべきなんじゃないかなと思っております。

あと、これはこれからの大学運営を担っていく方々が考えることかもしれませんが、生田キャンパスにおける学部の新設や編成替えなども今後あり得るかもしれません。神田キャンパスの法学部や商学部などの定員をある程度やりくりするかたちで、生田に新しい学部、例えば社会知性開発学部という名称の学部の新設があるかもしれませんね。

結果的に、今年新設した学部は、国際コミュニケーション学部になりましたが、この新学部設立に当たっては、学内でどのような学部をつくったらよいかについての議論がなされ、その中には社会知性開発学部という提案もありました。当時、それを聞いた時は、正直に言うところな学部をつくりたいのかよくわからなかったんですね。何を勉強するんだろうって思ったんです（笑）。でもSDGsについて関心を持つようになって、改めて考えてみると、社会知性開発学部というのはSDGsを本格的に学問としてやるとするならばありなのかなと。今後二、三年すれば、そういった学部を新設できる可能性はあるんじゃないかと考えるようになりました。

昨年、ラグビーのワールドカップがありました。目標を達成するために皆が同じ絵を見なくてはいけません。Same Pictureという言葉ですが、それが必要だと思っただけですね。だからそれを学長な

り学部長なり、ある程度、責任のある立場の方が教職員、学生、受験生に対して、専修大学はこういう大学なんだっていう同じ絵を見せる必要がある。今、高校三年生は非常に大変な状況の中で勉強していると思うんですが、勉強する動機付けのために色んなイメージを共有化する必要があるんじゃないかって感じますね。

（日高）今、Societyにおける大学教育の在り方がけっこう議論されています。例えば大学入試で数学とか情報を重視するような考えが、かなり表に出てきている。それは真理の探究としての大学じゃなくて、先生がおっしゃった統計とか、情報分析とかITを駆使した対応を考えると、そういう人材の養成が必要になってきて、それで数学とか情報が必要とか言われ始めた。数学はどの分野でも必要だと僕は昔から思っているんですけどね。刑法の世界は数学を抜きにして考えられませんから。そういう点ではさっき言った生田の学部学科の在り方を考えることは、Societyにおける大学教育の在り方を考える一つの材料になるかもしれません。つまり、大学はどういうふうに舵を切っていけばよいのかという課題の設定です。ただ、いずれにしても生田というのは面白い場所ですよ。

（佐々木）毎年、六月頃に新入生にアンケートを取って、「生田キャンパスはどうですか？」って学生に聞くと、「山を登るのが辛い」と答えてくる（笑）。

（日高）皆それをやってきたんだよ（笑）。

（佐々木）どうしても「登る」＝「辛い」というイメージになっ

てしまう。これを変えたいんですね。「登る」＝「楽しい」に（笑）。

山の上に行く面白くことができるんだって生田キャンパスの魅力をアピールしていくことがもつと必要なのかなって僕は思っています。例えば「山」と言わないで「ヒルズ」と言おうとか、生田キャンパスのキャッチフレーズを「生田データサイエンスヒルズ」なんてするのも面白い。あそこに行く面白くことをやっている人がたくさんいて、こんなことができるんだよねということ、産業界も含めて認知されるようになればいいんじゃないかなというふうに思っていますね。海外の大学を含めて、山の上にある大学って結構多いですから。

（日高）生田は大学のキャンパスとしては、非常にキャンパスらしいキャンパスです。自然の中にあつてね。山登りがキツイというのは、心臓破りの坂と言われた一〇号館の横の坂のせいですよ。そのため一〇号館を建てる時に、校舎の中にエスカレーターを付けようよと、上まで行けるからと言って主張しました。おかげで、今や一〇号館のエスカレーターを使うと、心臓破りの坂を登らなくても上まで行けるという状況にはなつた。問題は魅力ですね、上に行ってみようかという魅力をどうやってつくるかですね。

（佐々木）生田キャンパスは幸い敷地がたくさんあるし、商学部の先生たちが神田に來たので研究室にかなり余裕ができました。だからラボラトリーじゃないですけど、ある先生がデータサイエンス関

連の研究をやっていらつしゃつたら、小さな個人研究所みたいな形をつくつて、そこに学生が出入りしたり、産業界の方が出入りしたりして、「何か面白いことをやっているよあそこは」みたいなことを発信したらどうかと思っています。あちこちに長屋のような形で、学生が興味津々でのぞき込めるような雰囲気を生田はつくれるんじゃないかなと考えています。

（日高）可能性は十分ありますよね。

（佐々木）そういうものを、生田では今後一〇年間をかけてつくっていく。そうすると生田キャンパスの役割が、かなり明確になつて、本当に素晴らしい遠望の利いた、自然環境の豊かなキャンパスになつていくんじゃないかなと思いますね。

（日高）二〇〇二年に二一世紀ビジョンとして「社会知性の開発」という言葉をつくりました。あれは一〇〇年間のスパンでの方針ですけれど、編み出した理由の一つに、象牙の塔としての大学はもう壊さなければいけない。象牙の塔の外に出て、社会の中でその研究、教育を発揮しなければいけない、という思いがあります。「社会知性の開発」を英訳すると、Socio-Intelligenceになります。Socioというのはラテン語でsocius（ソキウス）です。sociusには、単に社会という意味だけではなく、社会の中にあつて社会に立つという意味まで含んでいる。そうすると、Society3.0にあつても専修大学は、社会の中にある問題を捉え、それを解決し、社会を引っ張つていかなければいけない。そういう点では、「社会知性の開発」は

ロングランのアドバルーンだと思っんです。

佐々木先生がおっしゃったSDGsを取り入れ、まず目に見えるところから具体化していくという作業は、学部編成にも繋がるでしょうし、Societyの中で大学教育をどうするかという答えにも繋がると思います。でもこれからの一〇年間は、何度も言うように大変な作業になると思います。

(佐々木) それは私も同感です。日本だけでなく世界中に大学はたくさんあるわけです。これからは専修大学にしかできないことをやるという意識がどうしても必要なんじゃないかと思います。とくに私立大学においては。

(日高) あと、石巻専修大学が持つ理系との連携も大切です。経営学部の中に今度、情報マネジメント学科が設置される予定ですが、ここでも連携が取れますよね。

(佐々木) そのほかにもつい先日、石巻市が「SDGs未来都市」に選定されました。これは石巻専修大学だけでなく、専修大学自体とも連携できるなという印象を強くしましたね。

(日高) 少子化が進む中で、国公立大学では統合や提携が進んでいます。私学の場合は建学の精神があるから、私は、潰れるか生き残るかのどちらかだと思うんですけど、幸いにして石巻専修大学と専修大学は同一法人の大学だからハイブリットできますよね。これはある意味では、将来に向けての活力を残存できていると言えます。今後一〇年間で専修大学がどこまで大学としての形を残せるか。そ

のための連携です。

(佐々木) これからの一〇年は大変だと思えますが、非常に楽しみでもあります。どういうふうになるかなというのが。

(日高) 法人としては厳しい状況が当面続きます。東日本大震災の後始末もまだ残っていますから。一番バッターで私学を立ち上げた専修大学としては、どんな社会状況であろうと大学教育に火を灯さなければいけない。人材を社会に送り出さなければいけない。これはミッションですからね。

オンライン授業の可能性を求めて

(佐々木) 教育の火を消してはいけないということで、オンライン授業について、改めてお話しすると、後期はオンライン授業を対面授業の救済手段、ないしは補完手段としてではなく、積極的な教育ツールとして考えていかなければいけないと思っています。

例えば国際交流という観点からお話しすると、時差がある国同士でのリアル配信は難しいかもしれませんが、時差の少ないアジアの大学同士なら可能になります。先日、ラオス国立大学の先生がオンラインで会計の授業をしてくれました。本当はこちらへお越しになる予定だったのですが、この状況では難しいので、「じゃあオンラインでやりましょう」ということになったんです。国際交流の部分でのオンライン授業というものの可能性を追求する一つのモデルケースになるんじゃないかと思っています。

他にも、伊勢原にいる体育会所属の学生に対する支援策としてや、社会人に対して、さらには神田と生田を繋いで行うなど、これまで我々がしようと思ってもできなかったことがオンライン授業なら可能になると思うんですね。もちろん、質を高める必要は当然あると思いますし、現状としては、学生諸君へのケアが最も重要だと思いますけれども、第二段階としてはオンライン授業を積極的に活用していく、そういったフェーズになっていくんじゃないかなと思います。

(日高) 創立一三〇年の時に、東アジア圏、つまり黒潮ラインの国々の大学との国際交流提携校の強化を打ち出しました。それが今、形になってきて、専修大学で学んだ研究者が増えてきました。中国、韓国、ラオス、ベトナムにも専修大学卒業生の研究者がかなりいます。そういう研究者同士の相互関係ができると、先生がおっしゃったオンライン授業が十分に可能ですよね。

(佐々木) 国内の大学の受験市場では、何とか大学と何とか大学が同じグループだねとか、そういう話が結構出ているけれど、専修大学がカテゴライズされているグループは別に自分で決めたわけじゃないので、あまり一喜一憂する必要はありません。むしろ自発的にグループ化を進めるとするならば、国際交流提携校との間でグループ化して、オンライン授業を積極的に進めていく必要があるんじゃないかなと思います。

(日高) 一五〇年に向けての一つの道ですね。

(佐々木) インターナショナルライアンスです。それを積極的に

進めていくというのは、戦略的には重要なんじゃないかと思えます。